子どもの頃の遊び体験と，成人後の安全認識および不安全行動との関連
― 社会福祉施設従事者および社会福祉系大学生を対象とした質問紙調査 ―

田口　豊郁[1,2]，大森　彩子[3]，福島　康弘[2]，
八重樫牧子[4]，田口　陽子[5]

Relation between Childhood Play and Safety Recognition or Risk Behavior in Adulthood : Questionnaire for Social Welfare Facility Staff and University Students of Social Welfare

Toyohiro TAGUCHI[1,2], Ayako OHMORI[3], Yasuhiro FUKUSHIMA[2],
Makiko YAEGASHI[4] and Yoko TAGUCHI[5]

キーワード：不安全行動，不安全状態，危険感受性，子どもの安全，子どもの遊び体験

概　　要

現在，産業現場，学校教育現場等では安全教育が実施されている．安全教育によって，各個人の危険に対する感受性を高めることができれば，自分および他人の不安全行動および不安全状態を察知し，事前に危険を回避できるようになる．一方で，子どもの頃の遊び体験が様々な感受性・社会性を育てることが示されてきた．

これまで，子どもの遊び体験と危険感受性の関連についての研究は行われていない．そこで，本研究では，子どもの頃の遊び体験と危険感受性の関係を明らかにすることを目的とし，社会福祉現場職員および社会福祉関連の職業を目指す社会福祉系大学生を対象に①安全認識と安全行動および②子どもの頃の遊び体験，に関する調査を実施した．その結果，①安全認識と安全行動が危険感受性の重要因子であること，②子ども時代に積極的もしくは肯定的で能動的な日常生活を送ることが危険感受性の獲得に関係があること ―― を明らかにした．

1．緒　　言

子どもの頃の遊び体験は様々な感受性を育てることが，近年明らかにされつつある．

日本学術会議[1)]の子どもの成育環境分科会委員会は，現状や問題点を含めた３つの視点として，⑴子どもの群れる場の重要性，⑵多くの人によって子どもが育まれる場の重要性，および⑶子どもの視点に立つ環境形成の場の重要性を挙げ，以下の８項目 ―― ①子どもたちが群れて遊ぶ「公園・ひろば」の復活や，②多様な人に育まれる住環境の推進，③遊び道具の復活，④自然体験が可能な環境づくり，⑤健康を見守る医療環境づくり，⑥健康生活のための環境基準の整備，⑦地域コミュニティの拠点としての教育・保育環境整備，⑧活発な運動を喚起する施設・都市空間づくり ―― の必要性について提言した．

また，遠藤[2)]らは，小学１年生～６年生（2,205人）を対象に，児童の遊びの実態と心理的発達に与える影響（特に攻撃性・社会性に着目）を検討することを目的とした調査を行った ―― ①遊びに関する質問紙調査および②心の状態を知るための心理検査（攻撃性尺度および社会的尺度）を行った．その結果，児童は，主として外遊びよりも内遊び（室内遊び）を好み，遊びの種類については，「ボールゲーム遊び」や「テレビ

（平成27年年10月21日受理）
[1]川崎医療短期大学　医療介護福祉科
[2]川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科
[3]岡山市役所岡山っ子育成局子ども総合相談所
[4]福山市立大学　教育学部　児童教育学科
[5]NPO 法人　子育て応援ナビ　ぽっかぽか
[1]Department of Medical Care Work, Kawasaki College of Allied Health Professions
[2]Department of Social Work, Faculty of Health and Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare
[3]General Child Consultation Services, Okayama City Child Rearing Bureau
[4]Faculty of Education, Department of Childhood Education, Fukuyama City University
[5]Incorporated Non-Profit Organization “Kosodate-Oen-Navi, Pokka-Poka”

ゲーム遊び」が多くの割合を占めており，テレビゲームやマンガを読むといった一人で行う内遊びをする児童が多くなっていることを特徴として挙げた．遊ぶ集団の人数も少数化しており，特に女子の方が少ない人数で遊ぶ傾向があるという現状が見受けられた．さらに，内遊びは児童の攻撃性を高める傾向があることや，外遊びは社会性を高めるということを明らかにし，戸外で展開される集団遊びが児童の社会性を高めることができることを報告している．

八重樫[3,4]は，児童館・児童センターに来館している小学校１年生から高校３年生（520人）を対象に，児童館の利用状況と子どもの遊びが子どもの社会性の発達に与える影響について検討すること，および，子どもの社会性に関する尺度（項目）について項目反応理論を用いて検討し，尺度の確定を行うことを目的とした調査を行った．その結果，継続的に少人数の子どもの社会性（協調性と創造性）を測定できる17項目の確定をすることができ，また，外遊びが協調性や創造性に影響があることを確認し，児童館や学童保育が仲間集団の形成に重要な意味を持っていること報告した．

子どもの頃の遊び（生活）体験は，その後の子どもが獲得する社会性に大きく関与しているといえる．子どもが獲得していく社会性の中に安全認識・安全行動といった危険感受性に関わるものも含まれるのではというのがこの研究の発端である．

事故・災害（accident）により，人は傷害・ケガ（injury）を負うことになる．Heinrich HW[5,6]は，「同一の人間に類似した accident が330回起きるとき，そのうち300回は傷害を伴わず（no injury），29回には軽い傷害（minor injury），１回には重い障害（major injury）が伴う．そして，injury の有無・重軽にかかわらず，すべての accident の背景に，おそらく数千に達すると思われるだけの［不安全行動］と［不安全状態］が存在する．」と述べている．すなわち，「不安全行動と不安全状態をなくせば，accident も injury もなくせる．」のである（事故予防の原則）．事故を予防するには，重篤事故のみに着目するのではなく，背景にある「不安全状態と不安全行動」の除去が重要である．

一方，現在，危険感受性には確かな定義がなく，危険感受性は不安全な状態を認識することだけなのか，もしくは不安全な状態を認識した上で，その不安全な状態を回避する行動をとることも含まれるのかという点で，研究者や研究分野の間で危険感受性の定義の見解はわかれている[7,8]．

そこで，子どもの時代の遊び（生活）体験とその後大人になってからの危険感受性（本稿では，不安全行動および不安全状態に気づき，それらを回避する能力をいう）の関連について明らかにすることを目的として以下の質問紙調査を行った．

① 不安全行動に対する自身の危険認識と，その不安全行動を自身が敢行する確率に関する調査．

② 子どもの頃（小学校３～６年生）の遊び（生活）体験についての調査．

２．対象および方法

社会福祉施設関連業務の従事者および，将来社会福祉関連業務に従事しようと学習している社会福祉系大学生に対して，①安全認識と安全行動および，②子ども時代（小学校３～６年）の遊び（生活）体験について質問紙調査を実施した．

「第12次労働災害防止計画（H25～H29）」[9]の中で，「社会福祉施設」が重点業種対策に指定された．現在，社会福祉施設の安全対策は重要課題となっている．このような背景のもとで，本研究では，上記の調査対象を選定した．

2-1. 調査対象：

2010年６月～12月に以下の対象者に質問紙調査を実施した．

① 社会福祉施設従事者：240人（有効回答数194人），年齢50.4±11.2歳（平均値±標準偏差），男性31%，女性69%．

② 社会福祉系大学生：105人（有効回答数91人），年齢21.0±0.7歳（平均値±標準偏差），男性48%，女性52%．

―― で有効回答者数は，285人であった．

2-2. 調査方法・内容：

集合調査法とし，自記式質問紙による調査①～③を実施した．

１）不安全行動に対する自身の危険認識と，その不安全行動を自身が敢行する確率に関する調査[10]

先行研究の「リスクをともなう行動リスト」(以下，リストと略す）を参考に，学生など自動車免許を持っていない人にも，回答できるように自動車に関わる項目を削除し，さらに，より生活に密着した自転車の安全に関わる４項目を筆者が作成・加筆した16項目のリストを使用した．

リストに記述された行動がどれくらい危険であるか（以下，安全認識とする）と，リストに記述された行

動をとる確率（以下，敢行確率と略す）の評定を求める質問で構成されている．リストは歩行や自転車での通行などの交通場面と，それ以外の日常場面の２つの場面から構成され，具体的な不安全行動が記述されている．

２）子どもの頃（小学校３～６年生）の遊び（生活）についての調査

子どもの頃の遊び（生活）環境についての質問紙は，子ども環境学会が作成した「成育環境にかかわるアンケート調査用紙」[11]の中から「能動的で肯定的な生活に関する項目（36項目）」を用いた．また，子どもの頃（小学校３年生から６年生）の記憶を想起して記入してもらった．なお，「成育環境にかかわるアンケート調査用紙」[11]に従い，子どもの頃を小学校３年生から６年生に設定した．

なお，この調査については

① 社会福祉施設従事者：240人（有効回答数163人），年齢50.4±11.5歳（平均値±標準偏差）

② 社会福祉系大学生：105人（有効回答数89人），年齢21.0±0.8歳（平均値±標準偏差）

―― で有効回答者数は，252人であった．

2-3. 得点化

１）安全認識得点および安全行動得点

安全認識得点については「全く安全である」を０，「非常に危険である」を100として，敢行確率については「決して行わない」を０％，「必ず行う」を100％として回答を求めた．なお，敢行確率については，集計，分析の段階で確率得点（以下，安全行動得点とする）として点数化（100％→０点，０％→100点）し，得点が高いほど不安全行動を「行わない」，得点が低いほど「行う」として，安全認識得点および安全行動得点とも得点が高いほど安全側であるとした．

２）子どもの頃の生活得点

２件法で回答を求めており，１項目を１点，合計36点満点として得点化した．なお，逆転項目については修正を加えた上で得点化した（高得点であるほど，積極的・肯定的な生活をしていた）．

すなわち，「安全認識得点（100点満点：得点が高いほど安全側）」および「安全行動得点（100点満点：得点が高いほど安全側）」，子ども時代の「生活得点（36点満点：高得点であるほど，積極的・肯定的な生活をしていた）」を算出した．これら３種類の得点を比較検討した．

2-4. 倫理的配慮

回答者に対し，口頭と文書で以下のことを説明した．回答結果は，本研究（学会発表および研究論文として公表）以外には使用しない，研究への協力は自由で，研究協力の諾否等によって，絶対に不利益を被ることがない，質問紙は無記名で個人が特定されることなく，プライバシーの保持は保障される，データは厳重に保管し他に使用しない ―― ことを説明した．調査用紙の提出・回収をもって，本研究に同意したと見なした．

3．結　　果

3-1. 安全認識得点と安全行動得点

安全認識得点と安全行動得点の散布図および，回帰式と相関係数を図１に示した．

安全認識得点（16項目）と，安全行動得点（16項目）の平均点間で，有意な相関（$r=0.524^{***}$，$\rho=0$ の検定）があった（図１）．なお，個人の認識得点の平均点の（平均値±標準偏差）は（67.8±17.6）で個人の行動得点の平均点の（平均値±標準偏差）は（64.6±17.9）であった．

安全認識得点および安全行動得点の各中央値（70.0および61.9点）で４分割し，各象限を以下のように「安全群」，「慎重群」，「危険群」および「冒険群」と名付けた（図１）．

① 「安全群」：安全認識得点も安全行動得点も高い群

② 「冒険群」：安全認識得点は高いが，安全行動得点は低い群

③ 「慎重群」：安全認識得点は低いが，安全行動得点は高い群

④ 「危険群」：安全認識得点も安全行動得点も低い群

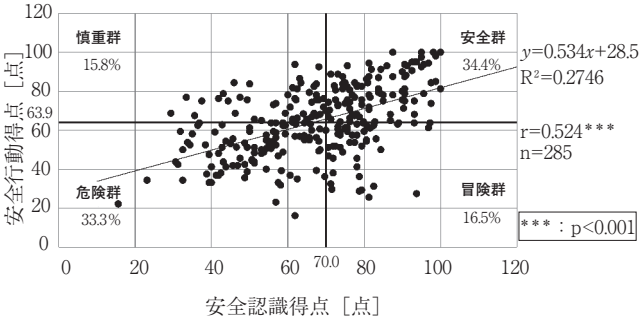

図１　安全認識得点と安全行動得点

表１　社会福祉施設従事者と社会福祉系大学生の比較（安全認識，安全行動）

	①　全　体		②　社会福祉施設従事者		③　社会福祉系大学生		②と③間の有意差
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
安全認識得点	67.8	17.6	**70.9**	17.8	**61.2**	15.3	＊＊＊
安全行動得点	64.6	17.9	**68.4**	17.7	**56.7**	15.5	＊＊＊
n	285		194		91		

＊＊＊：p<0.001

世代間（社会福祉施設従事者と社会福祉系大学生）で，安全認識・安全行動得点に有意な差があった．
（社会福祉施設従事者＞社会福祉系大学生）

3-2. 社会福祉施設従事者と社会福祉系大学生の比較（安全認識得点と安全行動得点）

安全認識得点と安全行動得点を社会福祉施設従事者と社会福祉系大学生で比較した（表１）．

社会福祉施設従事者の安全認識得点の［平均値±標準偏差］は［70.9±17.8］であり，安全行動得点の平均値の［平均値±標準偏差］は［68.4±17.7］であった．一方，社会福祉系大学生の安全認識得点の［平均値±標準偏差］は［61.2±15.3］であり，安全行動得点の平均値の［平均値±標準偏差］は［56.7±15.5］であった．社会福祉施設従事者と社会福祉系大学生を比較すると，安全認識得点および安全行動得点とも，［社会福祉施設従事者＞社会福祉系大学生］で有意な差があった（表１）．

3-3. 子どもの頃の生活得点と，安全認識得点および安全行動得点

子どもの頃の生活得点と，安全認識得点および安全行動得点の散布図および，回帰式と相関係数を図２および図３に示した．

子どもの頃の生活得点と安全認識得点の相関係数（r＝0.251***），子どもの頃の生活得点と安全行動得点の相関係数（r＝0.266***）であり，両者とも有意な相関を示した（ρ＝０の検定）．

3-4.「安全群」，「慎重群」，「危険群」および「冒険群」と，子どもの頃の生活得点

図１で，分類した「安全群」，「慎重群」，「危険群」および「冒険群」別に，子どもの頃の生活得点の平均値と標準偏差を求めた．安全群の子どもの頃の生活得点の［平均値±標準偏差］は［26.3±4.6］，冒険群は［25.2 ± 4.2］，慎重群は［25.0 ± 3.9］，危険群は［23.9±4.3］であった．

４つの群と子どもの頃の生活得点との関係を一元配置分散分析および多重比較を用いて解析したところ，安全群と危険群間に有意な差（F(3, 248) = 4.421, p<0.01）がみられた．他の群間には有意な差はみられなかった（図４）．

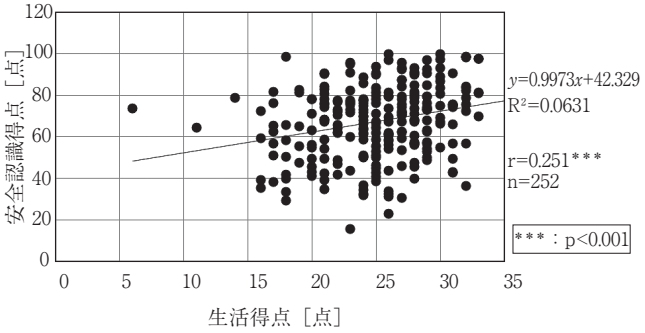

図２　安全認識得点の平均値と生活得点

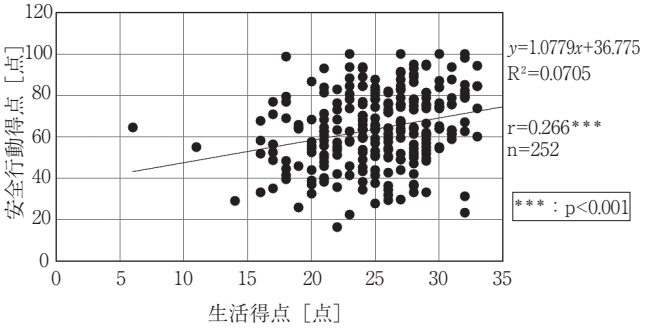

図３　安全行動得点の平均値と生活得点

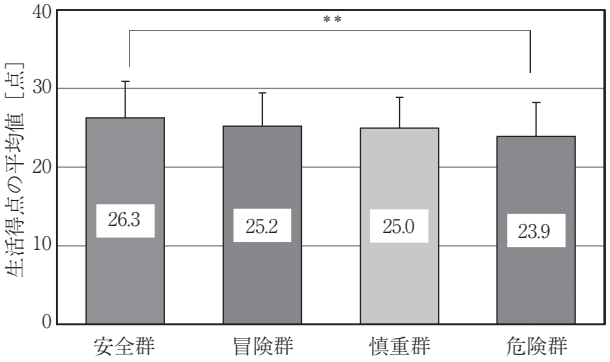

図４　危険認識群別の子どもの頃の生活得点の比較

4．考　　察

4-1. 安全認識と安全行動，および危険感受性

安全認識得点と安全行動得点間に有意な相関があった（図１）．相関関係からは因果関係を示すことはできないが，安全認識と安全行動の因果関係を考えた場合，安全行動をとるので安全認識が高いとは考えるより，安全認識が高いので安全行動をとると考える方が自然である ―― 安全認識（因）→安全行動（果）と考えられる．したがって，安全認識が高いと安全行動をとり，安全認識が低いと安全行動をとらずに危険な行動をおこしやすいことが示せた安全認識が安全行動を決定する重要要素であると考えられる．

また，安全認識得点と，安全行動得点のそれぞれの中央値で４つの群に分類することにより，安全群と危険群を明確に明示することができた．

安全群を危険感受性が高い群，危険群を危険感受性が低い群と考えると，危険感受性は，安全認識と安全行動の２因子で表すことができる．すなわち，危険感受性は，不安全状態や不安全行動に気づき（安全認識），それらを回避する（安全行動）能力のことであると定義できると考えられる．

現在，危険感受性には明確な定義がなく，危険感受性は不安全な状態を認識することだけなのか，もしくは不安全な状態を認識した上で，その不安全な状態を回避する行動をとることも含まれるのかという点で，研究者や研究分野の間で危険感受性の定義の見解がわかれている状態である．

安全認識得点および安全行動得点とも，[社会福祉施設従事者＞社会福祉系大学生]で有意な差があった（表１）．社会福祉施設従事者の方が社会福祉系大学生よりも安全側でった．この結果は，芳賀らの報告[10]の若年群の方が中年群よりもリスクテイキングの傾向が強いという結果と一致している．このことから，子どもの頃の遊び体験だけでなく，それも含めたうえで，年齢を重ねるごとに得られる何らかの理由（体験や経験，情報等）によって，危険感受性は獲得されていくのではないかと考えられる．人生経験の差や安全教育の学習時間の差，時代とともにその遊び場所で行われる遊びの方法や周囲の様子が変化し，その遊び場所のイメージが異なっている場合に生じる差など，様々な要因が考えられるため，その点に考慮しつつ，今後，さらに検証していく必要があると思われる．

4-2. 安全認識と安全行動（危険感受性）と子どもの頃の遊び（生活）体験

生活得点の平均値については安全群の方が危険群よりも高かった（図４）ことから，子どもの頃に積極的もしくは肯定的で能動的な日常生活を送ることが，その後の危険感受性（安全認識および安全行動）に関係があると考えられる．

積極的もしくは肯定的で能動的な日常生活とは，例として日常生活の中で「いろいろなことに興味をもつこと」，「からだを動かす遊びが好きなこと」，「みんなと仲良くあそぶこと」，「困ったとき，親が助けてくれると思うこと」，「小さい子のめんどうをみたり，助けたりすること」などが挙げられる．自分で積極的もしくは能動的に何かを行うためには，その物事に対して思慮する力が必要であると思われ，もし困ったことになっても周りの人が助けてくれると信じることができなければ，それを実行することが難しくなると考える．つまり，そのような積極的もしくは肯定的で能動的な日常生活を過ごすことによって，自分で考え，行動する体験を重ね，物事を認識し行動する力を養うことができるのではないかと考えられる．

また，この子どもの頃の日常生活の項目の中には，いくつか遊びに関する項目も含まれている．大畠ら[12]によると，遊びは児童期において非常に重要なものと考えられており，子どもたちは遊びのなかで，他者の視点や立場に立つ経験をし，他者理解を深め，互いに自己主張したり，友達の意思や要求を受け入れたりしながら，人との交流の仕方を学んでいくとされている．つまり，子どもにとって遊びは社会の中で生活していくために重要な成長の場なのである．

緒言で述べたように，遠藤ら[2]は子どもの遊びと社会性・攻撃性との関連について述べており，八重樫ら[3,4]は子どもの遊びと社会性（協調性と創造性）との関連について述べている．

そのような論理に対して，今回の結果である子どもの頃の遊びも含めた日常生活と危険感受性の関連は，展開として一致していると考えられる．つまり，社会性を広い意味で捉えると，先行研究で述べられている子どもの遊びによって高められる社会性の中に，危険感受性も含むことができると思われる．ここでいう社会性とは，「生を受けてから社会の成員になるまでの過程を身につけていくものであり，人間関係を形成し，円滑に維持する能力として考えられる．近年，社会的コンピタンス，社会的スキルなどの言葉が社会性に類

似した意義でよく用いられる」[13]と定義されているものである．

したがって，危険感受性を高めるためには，子どもの頃に遊びも含めた日常生活の中で積極的もしくは能動的に考え，行動し，肯定的な生活を過ごすことが大切であると考える．

4-3. 安全教育

安全認識と安全行動の散布図から４象限に分割し，４つの群に分類できた（図１）ことから，高い安全認識をもつ人が，必ずしも安全行動をとるとは限らないことが明らかとなった．高い安全認識をもっていても安全行動をとらない人，低い安全認識によって安全行動をとらない人など，今回の結果だけでも以下に説明する４種類の集団が存在している．

「安全群」は安全認識が高く，その認識力によって認識できる危険をできるだけ回避する傾向が強いといえる．「冒険群」は安全認識が高いにも関わらず，敢えてその危険を回避せず，不安全な行動をとってしまう（リスクテイキング）傾向が強いといえる．また，「慎重群」は安全認識は低いが，基本的に危険な行動を回避する傾向があるため，結果的には安全が確保されると思われる．しかし，その場の不安全な状態を認識して対応しているわけではないため，特殊な不安全状態や状況によっては，不安全な状態に対応しきれない可能性がある．一方，「危険群」は安全認識が低いため，不安全な状態に気づけないまま，不安全な行動をとってしまう傾向が強いといえる．しかし，安全意識を高める教育を行えば，安全行動とる可能性の大きい集団である（教育効果が期待できる）．

これらの全く異なる４つの群に同様の安全教育を行っても，その効果は薄いと考えられる．従って，それぞれの群の特徴を捉えた上で，効果的にそれぞれの足りない部分を補うための教育を行う必要がある．特に，「冒険群」に対する教育アプローチについて議論を深めることが今後は求められる．

4-4. 子どもと子どもに関わる人に対する安全教育

本研究では，自分にとっての安全認識・安全行動を調査した．図１で，図の右・上に行くほど危険感受性が高いとすると，左・下に行くほどリスクが高い（自分の安全確保ができない）人といえる．産業現場では作業者の危険感受性を高めるために危険予知訓練など様々な取組が実践されてきた．作業者に対する安全教育は重要な取組の一つである．

「子どもの仕事は遊ぶこと」[14]であるから，安全な遊び（仕事）環境の確保が重要である．子どもに対しても安全教育は重要と考える．子ども自身に安全教育を行い，安全認識を高めて，安全行動をするように教育・訓練（危険感受性を高める）することが試みられている．一方，乳幼児あるいは小学校低学年程度までの子どもに対しては，子ども自身に対する安全教育よりも，基本的には子どもたちに関わる保護者や周りの大人の安全認識を高めることが重要である．すなわち，子どもたちに関わる保護者や周りの大人が，子どもにとっての不安全状態・不安全行動に気づく危険感受性（自分にとっての不安全状態・不安全行動に気づけることに加えて）を獲得する必要がある —— 自分にとっての不安全状態・不安全行動に気づけない大人が子どもにとっての不安全状態・不安全行動に気づくことは困難である．

田口ら[15, 16]によると，一般産業現場では，作業者自身にとっての「不安全状態」と「不安全行動」に気づき，作業環境の改善対策や危険回避行動に結びつけるための安全教育（危険予知訓練など）が実施されている．同一作業グループ内では，事故に結びつく「不安全状態」および「不安全行動」の共通部分が大きいので，安全教育によって，これらの共通認識を広げることができる．一方，社会福祉施設では，安全確保の対象として，作業者（職員）だけでなく，利用者が重要な位置を占めている．施設敷地外での事故や，屋外の事故では，利用者自身の行為による事故が多いため，利用者を考慮した安全対策が必要である．したがって，社会福祉施設の職員は，職員自身にとっての「不安全状態」および「不安全行動」に加え，さらに，利用者にとっての「不安全状態」および「不安全行動」を察知・理解する能力が求められる．この意味では，一般産業現場の作業者よりも高い危険感受性が要求されるといえる．一般産業現場では，自分自身の安全確保（とチームの安全確保）のみを考えれば良いが，社会福祉施設では，自分自身（職員）に加え，利用者の安全確保を考えなければならない．自分にとっての危険に対する感受性，から，利用者にとっての危険に対する感受性まで拡げていく教育・訓練が必要がある．

社会福祉施設の職員に求められる危険感受性についての考え方は，子ども（特に就学前の乳幼児）に関わる保護者や大人に対しても重要であると考える．

4-5. 本研究の限界

本研究は社会福祉関連業務に従事または従事しようとしている人という限られた対象に対しての研究であ

るので，本研究結果は限定的なものであるということは否めない．また，子どもの頃（小学校３年生から６年生）の記憶を想起して記入してもらうという回想形式の振り返り調査の結果，直接的な子どもの頃の体験と危険感受性の関係については，何らかの関連がある可能性を示すことはできたが，明確に関連を示すことはできなかった．調査対象を広げることと，子どもを対象に調査を行うことが今後の課題である．

５．結　　論

１）危険感受性（安全認識と安全行動）

安全認識得点と，安全行動得点のそれぞれの中央値で４つの群に分類することにより，安全群と危険群を明確に明示することができた．安全群を危険感受性が高い群，危険群を危険感受性が低い群と考えると，危険感受性は安全認識と安全行動の２因子で表すことができる．従って，危険感受性の定義として「危険感受性は，不安全状態や不安全行動に気づき，それらを回避する能力のことである」と提案したい．

２）危険感受性と子どもの遊び（生活）体験の関係

子どもの頃に積極的もしくは肯定的で能動的な日常生活を送ることが高い危険感受性（安全認識および安全行動）に関係があることが示せた．

３）危険感受性を高めるための安全教育

「安全群」,「慎重群」,「危険群」および「冒険群」の４群の特徴を捉えた上で，効果的にそれぞれの足りない部分を補うための安全教育を行う必要がある．

危険感受性を高めるためには，子どもの頃に積極的もしくは肯定的で能動的な日常生活（遊びも含めて）を送ることが重要である．

また，子どもの安全を考える時，乳幼児あるいは小学校低学年程度までの子どもに対しては，子ども自身に対する安全教育よりも，基本的には子どもたちに関わる保護者や周りの大人の安全認識が重要である．すなわち，子どもたちに関わる保護者や周りの大人が，自分にとっての不安全状態・不安全行動に気づけることに加えて，子どもにとっての不安全状態・不安全行動に気づく高い危険感受性を獲得する必要がある．

６．謝　　辞

本研究の実施にあたり，川崎医療福祉大学平成23年度医療福祉研究費の補助を受けた．

なお，今回の調査研究に関しご協力頂いた方々に，心より感謝申し上げます．

本研究の一部は，①第44回日本人間工学会中国・四国支部大会（下関，2011年11月），②シンポジウム「子ども人間工学の諸課題（子どもの人間工学委員会主催）」（日本人間工学会第53回全国大会，福岡，2012年６月）および③第18回岡山県保健福祉学会，（岡山，2012年１月，審査員奨励賞を受賞）で発表した．

７．文　　献

１）日本学術会議　子どもの成育環境分科会委員会：我が国の子どもの成育環境の改善について ― 成育空間の課題と提言 ―．日本学術会議ホームページ，2008．http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-20-t62-15.pdf

２）遠藤俊郎，星山謙冶，安田　貢，斉藤由美：遊びが児童の心身に与える影響について ― 児童の攻撃性・社会性に着目して ―．教育実践学研究12：25―34，2007.

３）八重樫牧子：地域における児童館の子育ち・子育て支援の評価に関する研究 ― 児童館施策の動向と児童館の子育ち・子育て支援に関する調査を踏まえて ―」，関西学院大学博士学位論文49：124―140，2009.

４）八重樫牧子：児童館の子育ち・子育て支援に関する調査研究からみた実践課題．川崎医療福祉学会誌19(2)：425―435，2010.

５）Heinrich HW, Peterson D, Roos N：“Industrial Accident Prevention（5th ed.)”, pp. 60―66, McGraw-Hill, New York, 1980.

６）井上威恭監修，(財)総合安全研究所訳：“ハインリッヒ産業災害防止論”，pp. 59―64，海文堂，東京，1982.

７）廣瀬文子，藤本順三，武田大介他：個人の危険感受性測定可能性の検討．電力中央研究所報告．研究報告．Y/電力中央研究所社会経済研究所編，通号08017，1―18，巻頭1―4，2009.

８）高橋一公：リスク行動下における危険感受性測定に関する研究 ― 危険感の構造および性格との関係 ―．睡眠と科学11(1)：31―39，1996.

９）厚生労働省：第12次労働災害防止計画．pp. 8―13，2013. http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/roudoukijun/anzen/anzeneisei21/index.html

10）芳賀　繁他：「質問紙調査によるリスクテイキング行動の個人差と要因の分析」，鉄道総研報告８（12）：19―24，1994.

11）こども環境学会：「あなたの子どもの頃の遊び環境についての調査」こども環境学会 HP, 2010. http://www.children-environment.org/

12）大畠みどり，本田千尋，北原麻理子，津久井敦子，中山純子，根本喜代江，小林正幸：児童期における遊びと社会的スキルの関連 ― 遊びの種類と頻度の視点から ―．東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要26：111―126，2002.

13）児童育成研究会（代表：岡本奎六）：コミュニティ施設利用の子どもの人間形成に及ぼす学際的研究．伊藤忠記念財団，2006.

14）文部科学省：家庭教育手帳 乳幼児編＜ドキドキ子育て＞．

pp. 46―47, 2010. http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/katei/main8_a1.htm
15）田口豊郁，小河孝則，竹中麻由美，他：社会福祉施設における福祉サービスおよび労働安全衛生のリスクマネジメント．平成15年度～16年度科学研究費補助金，研究者代表田口豊郁，課題番号15530388，研究成果報告書．2005.
16）田口豊郁：II 部 施設マネジメント 3 章社会福祉施設のリスクマネジメント．田宮奈々子，阿部芳道，山本秀樹編：根拠にもとづく高齢者施設ケア．pp. 62―73，金芳，京都，2010.

付録　質問紙

安全意識についての調査

Q 1．あなたは以下の行動がどれくらい危険だと思いますか．
「全く安全だと思う」を［0］,「非常に危険だと思う」を［100］として，あなたが感じる危険性の程度を0～100の数字で以下の回答欄に記入してください．

例）交通量が多く，信号も横断歩道もない道路を目隠しして横断した．（例）危険度 100

行　　動	危険度
1．踏切を渡ろうとして手前まで歩いてきたとき，警報が鳴り，遮断機が降りはじめたので走って踏切を渡った．	
2．背伸びをしても手の届かない所にあるものを取ろうとしたとき，手近なところに脚立がなかったので，座面が回転する椅子に乗った．	
3．海水浴に来たところ，波が荒いために遊泳禁止になっていたがかまわず泳いだ．	
4．石油ストーブの灯油が残りわずかになったという表示がでたので，火を消さずに給油した．	
5．交通量の多い道路の向こう側に渡りたいと思ったが，横断歩道は遠回りになるので，車がとぎれるタイミングを見計らい走り渡った．	
6．朝，自宅から自転車で駅に向かう途中，交差点の信号が赤だったが，車が来ないので渡った．	
7．アイススケートをしにスケート場に来たら，手袋を忘れたことに気づいたが，売店で売っている手袋を買わずに手袋なしで滑った．	
8．夕方，自宅近くのバス停でバスを降りて横断歩道を渡ろうとしたとき，信号は赤だったが，車が来ないので渡った，	
9．夜に自転車で帰宅するとき，街灯が点いていたのでライトを点けずに走った．	
10．電車に乗ろうとしてプラットホームに降りる階段の上に来たとき発車ベルが鳴りだしたので，階段を駆け降りて閉まりかけのドアに飛び込んだ．	
11．友人と一緒に駅へ向かう途中，友人だけが自転車に乗っていたので，友人の自転車の後ろに乗せてもらった．	
12．友人の家で，素人が調理したフグ料理を食べた．	
13．自転車で傘差し運転をする．	
14．自転車で並走する．	
15．道路の右側を自転車で走る．	
16．携帯電話を使用しながら自転車の運転をする．	

Q 2．あなたはどれくらいの確率で，以下に書かれているような行動をとると思いますか．
「決して行わない」を［0%］,「必ず行う」を［100%］として，あなたが行動する確率を0～100の数字で以下の回答欄に記入してください．

例）交通量が多く，信号も横断歩道もない道路を目隠しして横断した．（例）確　率 0

行　　動	確　率
1．踏切を渡ろうとして手前まで歩いてきたとき，警報が鳴り，遮断機が降りはじめたので，走って踏切を渡った．	
2．背伸びをしても手の届かない所にあるものを取ろうとしたとき，手近なところに脚立がなかったので，座面が回転する椅子に乗った．	
3．海水浴に来たところ，波が荒いために遊泳禁止になっていたがかまわず泳いだ．	
4．石油ストーブの灯油が残りわずかになったという表示がでたので，火を消さずに給油した．	
5．交通量の多い道路の向こう側に渡りたいと思ったが，横断歩道は遠回りになるので，車がとぎれるタイミングを見計らい走り渡った．	

6．朝，自宅から自転車で駅に向かう途中，交差点の信号が赤だったが，車が来ないので渡った．	
7．アイススケートをしにスケート場に来たら，手袋を忘れたことに気づいたが，売店で売っている手袋を買わずに手袋なしで滑った．	
8．夕方，自宅近くのバス停でバスを降りて横断歩道を渡ろうとしたとき，信号は赤だったが，車が来ないので渡った．	
9．夜に自転車で帰宅するとき，街灯が点いていたのでライトを点けずに走った．	
10. 電車に乗ろうとしてプラットホームに降りる階段の上に来たとき発車ベルが鳴りだしたので，階段を駆け降りて閉まりかけのドアに飛び込んだ．	
11. 友人と一緒に駅へ向かう途中，友人だけが自転車に乗っていたので，友人の自転車の後ろに乗せてもらった．	
12. 友人の家で，素人が調理したフグ料理を食べた．	
13. 自転車で傘差し運転をする．	
14. 自転車で並走する．	
15. 道路の右側を自転車で走る．	
16. 携帯電話を使用しながら自転車の運転をする．	

子どもの頃（小学校３～６年生）の遊び（生活）体験についての調査

Q　あなたが子どもの頃（小学校３～６年生ごろ）のことを思い出して，以下の質問について，「はい」か「いいえ」のどちらかに○をつけてください．

1．食べることが楽しかった　1.はい　2.いいえ
2．食べものの好き嫌いが多かった　1.はい　2.いいえ
3．夜，よく眠れた　1.はい　2.いいえ
4．からだの調子はよかった　1.はい　2.いいえ
5．からだを動かす遊びが好きだった　1.はい　2.いいえ
6．いつも思いっきりあそんだ　1.はい　2.いいえ
7．毎日が楽しかった　1.はい　2.いいえ
8．いつもおちついた気持ちでいた　1.はい　2.いいえ
9．いろいろなことに興味があった　1.はい　2.いいえ
10. なんとなくつまらないと感じていた　1.はい　2.いいえ
11. いつもいらいらしていた　1.はい　2.いいえ
12. いろいろな遊びを思いついて遊べた　1.はい　2.いいえ
13. なにかするとき集中できた　1.はい　2.いいえ
14. 遊びにすぐあきることが多かった　1.はい　2.いいえ
15. ものを組み立てたり，作ったりすることが好きだった　1.はい　2.いいえ
16. ちがう人間になったりすることをよく空想した　1.はい　2.いいえ
17. よくいたずらをした　1.はい　2.いいえ
18. 外国へ行ってみたいと思った　1.はい　2.いいえ
19. 大人になったら「したいこと」があった　1.はい　2.いいえ
20. テレビ番組や本を読んで感激するとすぐ涙がでた　1.はい　2.いいえ
21. 友だちがいじめられているのをみると，悲しくなった　1.はい　2.いいえ
22. 好きな音楽をきくと，リズムに合わせてからだが動いた　1.はい　2.いいえ
23. 友だちとよくケンカをした　1.はい　2.いいえ
24. 友だちに，からかわれても平気だった　1.はい　2.いいえ
25. 学校の勉強はむずかしいと思った　1.はい　2.いいえ
26. 本を読むのが好きだった　1.はい　2.いいえ
27. みんなと仲良くあそべた　1.はい　2.いいえ
28. 小さい子のめんどうをみたり，助けたりできた　1.はい　2.いいえ
29. いじめられたことがある　1.はい　2.いいえ
30. 困ったとき，先生が助けてくれると思った　1.はい　2.いいえ
31. 困ったとき，親が助けてくれると思った　1.はい　2.いいえ
32. 花や植物に興味があった　1.はい　2.いいえ
33. 昆虫や鳥など生き物に興味があった　1.はい　2.いいえ
34. 自然とふれあうのが好きだった　1.はい　2.いいえ
35. いなかに住みたいと思っていた　1.はい　2.いいえ
36. 大きな町に出かけるのが好きだった　1.はい　2.いいえ